



## カタールフレンド基金（スチューデントシティ）

これまでの校長室だよりでも何度かお伝えしましたが、還暦を迎えるような歳となったせいか、最近では高校時代（仙台一高）の友人と旧交を温める機会が増えてきました。今回は「高校の友人シリーズ第4弾！」として、柴田君（原町小学校・宮城野中学校出身 東京工業大学卒業）の話に基づいて、子供たちをはじめ、皆様にお伝えしたい情報をまとめてみました。

彼は大学卒業以来、国や都市の将来計画を作るコンサルティングの仕事をしてきました。これまで彼が手がけてきたのは、カタール国の国土開発計画、ミャンマー国の全国交通マスタープラン、キューバ国の全国交通マスタープラン、中米6か国の物流マスタープラン、タイ国バンコク首都圏の都市鉄道網整備計画、マレーシア国クアラルンプールの都市交通マスタープラン、インドネシア国ジャカルタ大都市圏の交通マスタープラン、タンザニア国ダルエスサラームの都市交通システム整備計画などで、その仕事はまさに世界を股にかけるものです。

先週、帰省した彼と話をすることがありました。高校時代に机を並べて学んでいた彼の現在の仕事についての話を聞きながら、あの頃にはお互いに今の姿は想像もしていなかったことや、今の柴田君のように世界を股にかけて活躍するような仕事があることさえ知らなかったことなどについて話をしました。

実は、柴田君から彼の仕事についてじっくりと話を聞いたのは、今回が二度目でした。一度目は、東日本大震災直後に彼が帰省したときでした。

2011年夏、彼は当時の赴任先だったカタールから帰省し、被災した私たちと久しぶりの同窓会で再会しました。その時私は長町小学校の教頭でした。私が教員だと知って、柴田君が私に話してくれた内容を、今でも鮮明に覚えています。

現在、郡山小学校を含めて、市内の全小中学校の児童生徒（郡山小学校では6年生）が、年に一度仙台駅前のアエルビル8階にある仙台子供体験プラザ（「スチューデントシティ」「ファイナンスパーク」という施設で体験学習を行っています。これは自分づくり教育の一環として仙台市教育委員会が主催する事業で、小さな町を再現したブースで職業体験学習を行うものですが、この施設ができたのは、東日本大震災後、3年半ほど経った2014年8月のことでした。しかし私は、2011年の夏に、柴田君から、その施設につながる基金の話を知っていました。この施設は「カタールフレンド基金」によって実現したものです。カタールフレンド基金は、2012年1月に設立された、東日本大震災の被災地復興を支援するためにカタール国から提供された基金で、復興が本格化した2012年1月から2014年12月までの3年間にわたり、「子どもたちの教育」「健康」「水産業」の3分野を支援するプロジェクトを対象に、総額で約80億円の資金の助成がありました。

カタール国は1971年（私が小学生の頃）に単独で独立した国です。（他の首長国はアラブ首長国連邦として独立しました。）独立直後の1972年、日本はカタールと国交を樹立し大使館を設置しました。カタールは今では1人あたりの国民総所得(GNI)が世界6位(※1)、アジアでは1番高い国ですが、独立直後は国際協力機構（JICA）による技術協力が行われていました。経済的に大きな成長のきっかけとなったのは1990年台半ば以降のLNG（液化天然ガス）開発です。この開発は日本の中部電力のLNG引き取りコミット（契約）がきっかけで始まり、今では全世界のLNG生産量の3割を占め、カタールはエネルギー源供給において圧倒的な存在感を持つ国に成長しました。

※裏面に続く

切り取り線

子供たちのための、意見・提案・要望・校長に知らせたいこと など

2023年1月13日（ ）年（ ）組 児童氏名

※メールでも随時受け付けております。kosaki-k@sendai-c.ed.jp（校長直通）

大震災当時、柴田君はカタール国にいました。彼は、前述のような経済的発展を持続可能なものとするために、2008年から2012年にかけてカタールに滞在し、国土開発計画（QNMP：Qatar National Master Plan：※2）を作るコンサルタントチームに参加していたのです。彼は津波被害の様子をドーハのテレビで見て、大きな衝撃を受けたそうです。震災直後にカタール政府は復興支援基金設立を検討し始めており、それを知った柴田君は、2011年夏の同窓会で、被災地の同級生にいち早く明るい話題を届けてくれたのでした。

カタールでは、柴田君がコンサルティングを行っていた時期に計画、整備されてきたインフラ（経済基盤施設）を土台として新たなスタジアムも建設され、昨年2022年にはFIFAワールドカップを開催しました。「ドーハの悲劇」として記憶している方も多いと思いますが、カタールは、1993年に行われたアジア地区最終予選で初のワールドカップ本戦出場（1994年アメリカ大会）に王手をかけていた日本が、イラクとの最終戦の残り数秒で同点に追いつかれてしまい、本戦出場を逃した因縁の地です。7回連続でのワールドカップ出場となった今回のカタール大会では、グループ予選でドイツ、スペインに勝利し決勝トーナメントまで進むなど、サッカー日本代表は大活躍。「ドーハの歓喜」の声が上がったことは記憶に新しいところですが、そんなカタールとの関係で忘れてはならないのが、前述のように、東日本大震災被害からの復興のための支援をいただいたことです。「カタールフレンド基金」のおかげで、女川の水産加工施設（マスカー）、石巻の子供のための複合体験施設（モリウミアス）、子供のための社会経験施設（仙台子供体験プラザ「スチューデントシティ、ファイナンパーク」）、カタールサイエンスキャンパス（QSC）など、多くの施設やプログラムが作られました。柴田君はその後、仕事の関係でカタールの元首（国王）に会ったときに、被災地である宮城県出身者として、まずこの支援に対するお礼を述べたそうです。友人として誇らしく思います。

今回、この話を紹介したいと思ったのは、仙台市の小学生が利用しているスチューデントシティの成り立ちについて、身近な友人からの話を基に、カタールとの関連から詳しくお知らせしたいと思ったからです。そこからさらに郡山小学校の子供たちに伝えたいと思ったのは、柴田君がそうであったように、世界には、子供の頃や青年時代には考えも及ばないような様々な仕事があって、誰もがそんな仕事に就いて世界で活躍できる可能性があるということです。

私は、以前の校長室便り（2022年8月26日号「道を間違えた」）で、「もしも、これまでの人生の分かれ道で別の道に進んでいたら・・・と、くよくよと考えずに、今の立ち位置から一步一步前に進むことが大事だと自分に言い聞かせている」という内容のことを書きました。おそらく、子供たちの将来にも様々な分かれ道や多くの選択肢が現れて悩むこともあるでしょう。もしもその中に、子供たちがその時に抱いている夢以外のものや、それまで自分自身や親が想像もできなかったものがあったとしても、「目の前に現れた選択肢全てを排除せずに、まず受け入れて、そこから自由な心で一歩前に踏み出してみることが、夢のある将来につながるのではないだろうか。」柴田君の話を聞きながら、漠然とはありますが、そんなふうに思いました。

※1：総務省統計局「世界の統計2022」より

※2：<https://www.mme.gov.qa/QatarMasterPlan/default.aspx>  
<https://andp.unescwa.org/plans/1231>